

「高大接続改革」に向けての 本校の進路指導の取組

吉田 寿美

全国高等学校進路指導協議会 会長
東京都立豊多摩高等学校 校長

はじめに

平成は終わり、令和の教育が始まっている。

平成元(1989)年に、「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成、生活科の新設、道徳教育の充実」が謳われた学習指導要領が改訂された。その後、平成10(1998)年に「生きる力、教育内容の厳選」、平成20(2008)年に「思考力・判断力・表現力、授業時間数増加」を掲げた学習指導要領の改訂があり、各校で、学習指導要領に準じ各校の実態に合わせた教育課程を編成し、様々な教育活動を展開してきた。

平成30(2018)年には、「主体的・対話的で深い学び、社会に開かれた教育課程」を掲げた高等学校の学習指導要領の改訂(新学習指導要領)が行われ、令和4(2022)年の本格実施に向け、各校で、新たな教育課程編成に取り組んでいるところである。

平成2(1990)年に始まった「大学入試センター試験」は令和2年(2020)年で終了し、令和3(2021)年に「高大接続改革」の目玉でもある「大学入学共通テスト」(新テスト)へ変わり、現在の高校2年生が初めての「大学入学共通テスト」の受験生となる。

平成から令和にかけて、「高大接続改革」が始まっている。「高等学校教育改革」、「大学教育改革」、「大学入学者選抜改革」の三位一体の教育改革である。

「高大接続改革」の鍵は、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性を示す「学力の3要素」⁽¹⁾である。「学力の3要素」について、確実な育成を目指す高等学校、更なる伸長を目指す大学教

育、多面的・総合的評価を目指す大学入学者選抜という三者の相互関係から成る改革である。

本校は、東京都から「進学指導推進校」⁽²⁾の指定を受けている全日制普通科の高等学校である。新入生の100%近くが、大学進学を考え本校に入学してくる。現高校2年生は、「大学入学者選抜改革」の1期生となる。彼らが中学3年生の時の学校説明会では、新しい大学入試に対する高校側の取組に対して、生徒・保護者ともに関心が高く、高等学校を選ぶ一つの指標であることを実感した。

本稿では、「高大接続改革」に向けての本校⁽³⁾の進路指導⁽⁴⁾の取組のいくつかを紹介し、高等学校の様子を伝える。

I 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)

「高等学校教育改革」の施策の1つに、「学習・指導方法の改善と教師の指導力の向上」が掲げられ、「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの授業改善の推進」の項目が挙げられている。

1 アクティブ・ラーニング推進校

本校は、平成29(2017)～平成31(2019)年の3年間、東京都のアクティブ・ラーニング推進校⁽⁵⁾の指定を受け、先進校の視察や校内研修の実施を通して組織的な授業改善を目指している。「高校教育改革」で求められている、「学習・指導方法の改善と教師の指導力の向上」に対応した取組でもある。

本校のアクティブ・ラーニングに関する研究テーマは、「自立的な学習者育成を目指した教師の役割」である。教員は「生徒の学びを支援する」「生徒と共に学ぶ」役割となり、生徒主体の授業の実践を目指している。取組1年目の平成29(2017)年は国語・社会・数学・理科・英語の5教科が、取組2年目の平成30(2018)年からは全教科取り組むこととした。新学習指導要領は主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)と掲げており、全教科に関わる課題だからである。

形だけのペア・ワーク、グループ学習ではなく、教員が生徒の授業への集中度を意識するよう、「50分間、生徒の頭、心(実技では体)が活動する授業」とキャッチ・フレーズを決めて取り組んでいる。

先進校視察以外にも、校内でも授業公開、相互の授業参観を行い、コメントシートを活用し教員同士で学び合う雰囲気を作っている。

確実に授業が変わってきている。教員に、生徒の集中力を高めるよう、時間の管理(タイムコントロール)への気遣い、説明内容の精選、問題演習時間の増加等が見られる。生徒の書く・話す・発表する場面が増え、それらの活動への生徒の抵抗感がなくなっている。生徒同士の学び合いにより、成績下位層の生徒の理解度が高まっている。一斉授業、生徒同士の学び合いと、1コマの授業の中にメリハリが生まれている。

授業の変化は、数値としても表れている。平成30(2018)年度の学校評価で、授業に関する生徒の評価が、過去7年間で一番高かった。

2 哲学対話

平成29(2017)年より、放課後、月1回程度、研究者を招き希望者向けに「哲学対話」⁶⁾の講座を開いている。毎回、講座開催を生徒に知らせ、生徒は当日自由に参加する方式にしている。

「哲学対話」は、あるテーマ(問い)について、生徒同士が輪になって90分間話し合う活動である。話し合うテーマ(問い)も、生徒同士で決定する。生徒同士が、テーマ(問い)について話し合い、根本的な理解を深めていく。生徒が、考え抜く90分間の場である。「哲学対話」に参加した生徒は、考える面白さに気付

く。生徒に「自分の頭で考える」きっかけを与えたいとの思いで始めた取組であり、将来「自分の頭で考える」人になってほしいという願いを込めている。

「哲学対話」は、まさに主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)である。校内で講座を重ねていくうちに「自分の頭で考える」体験をする生徒が増えていく。進学実績向上を求めて始めた取組ではないが、結果的には進学実績をはじめ進路指導に効果があると考えている。

本校の哲学対話の様子は、5月17日、日経新聞の「キセキの高校(第5回)」で紹介されている。

https://r.nikkei.com/stories/topic_DF_TH_19050800

II 大学入学者選抜改革

1 民間の英語の資格・検定試験導入～英語4技能～

英語の授業が変わった。生徒が主体となり、英語で活動する場面が明らかに増えている。授業時間中に校内を歩いていると、英語の授業を行っている教室から、生徒の音読、スピーキングの声が聞こえてくる。英語で授業を行えるところは英語で行い、以前よりも、英語科教員が日本語を使用する場面が減っている。授業によっては、「ALL ENGLISH」の授業もある。

JET(英語等指導助手)又はALT(英語等教育補助員)の存在も大きい。本校の高校1～3年生に、週に1回、JET又はALTが主担当で、英語科教員が補助となるTT体制の英語の授業が行われている。JETもALTも日本語が上手であっても英語だけで授業を行い、生徒も英語で応え授業が進行する。

教員はもちろん生徒も、「英語4技能」というキーワードを意識しており、英語を使った活動の大切さを理解し活動している。生徒は、小学生の時から、英語の授業で英語を学んでいる。

民間の英語の資格・検定試験導入にそなえ、本校では、平成30(2018)年から、高校1・2年生全員を対象としたGTEC検定試験の校内実施を始めた。校内実施のためアセスメント受検とされ、結果は公的スコア(オフィシャルスコア)ではなく参考点である。しかし、民間の英語の資格・検定試験への動機付けと慣れ、

現段階での実力の把握という利点はある。民間の英語の資格・検定試験には、その他英検、TOEFL等があるが、現在はGTECの校内実施を行っている。

今秋、現高校2年生にはIDが付与される。来年度の4月から12月の期間に、高校3年生として民間の英語の資格・検定試験に出願する際に、IDを利用して成績提供の意思を示すことになっている。成績提供できる資格・検定試験は2つである。民間の英語の資格・検定試験の活用方針が、大学によって様々であり、生徒の希望する時期に、希望する試験が受けられるかなどの不安がある。しかし、現高校2年生が3年生にあがる日は日ごとに近づいている。

日々情報収集に努めながらも、殆どの生徒は複数の大学を受験するであろうことを考え、各大学の民間の英語の資格・検定試験に対する活用方針の違いに左右されない英語力を付けるということになる。

2 大学入学共通テスト（新テスト）

過去2回の「試行調査」の結果も公表され、大学入学共通テストの概要が見えてきている。

国語と数学で、記述式問題が出され、国語では20分、数学では10分と試験時間が長くなる⁽⁷⁾。

英語では、前述の民間の英語の資格・検定試験導入以外にリーディング100点、リスニング100点とリスニングの配点が高くなる。

全体的には、社会問題・日常生活と関連した問題、生徒同士の発表など授業や探究活動の場面を設定した問題、資料やデータを読解する問題が出題され、読解力・思考力・判断力・表現力が求められている。

授業では、生徒に新しい学力観の問題を解かせたり、二つのものを提示し共通点と相違点を考えさせたり、自分の言葉で説明させたりと、教員の指導の工夫が見られる。

「大学入学共通テスト」（新テスト）は、「大学入試センター試験」より、更に完成された基礎力を求めている。日々授業で学んだことを定着させる学習が不可欠である。授業では、前述のアクティブ・ラーニング推進校の取組を中心に、読解力・思考力・判断力・表現力の育成を目指しているが、以前にも増して日々の授

業と家庭学習の大切さを生徒に自覚させる指導を行っている。

3 「多面的・総合的に評価する」選抜

「大学入学選抜改革」では、受験生の「学力の3要素」を「多面的・総合的に評価する」選抜に転換する方針が打ち出されている。推薦・AO入試の拡大と多様化、調査書の改訂、e-Portfolioの活用、一般入試での志願者本人の記載資料の活用等と変更点が多々ある。選抜方法の変更・多様化に伴い、従来の進路指導よりも指導内容が多岐にわたり、手続きの理解も含め、進路指導にかかる時間が更に教員に必要である。

現高校2年生が受験生となる令和3（2021）年の大学入学選抜では、記載量の制限がなくなり詳細な記載が求められる調査書の作成、更にJAPAN e-Portfolio機能と連携した大学へのインターネット出願も予定されている。しかし、各大学の活用は様々であり、まだ明確には分からない。

本校では、推薦・AO入試の拡大と多様化、調査書の改訂、e-Portfolioの活用、一般入試での志願者本人の記載資料の活用等の変更にもそなえて、平成30（2018）年の高校1年生（現高校2年生）から、PCやタブレット、スマートフォンに生徒一人一人が自己の高校時代の学びを記録できるClassi（クラッシー）というe-Portfolio機能をもつソフトを導入した。生徒は、日々の学習、学校行事、部活動、留学・海外経験等とその都度記録し、蓄積している。部活動ではない校外の活動での大会記録、ボランティア活動、資格・検定結果もClassi（クラッシー）に記録できる。生徒の、校内外での様々な学びへの主体的な姿勢を支援するソフトである。記載内容は教員も見られ、虚偽の記入を防げる。

Classi（クラッシー）には、コミュニケーション機能もあり、連絡やアンケートも実施できる。本校では、昨年度の学校評価で、Classi（クラッシー）を活用したところ、アンケート集約にかかる時間が短縮され担当教員の仕事の負担が減るという効果もあった。

おわりに

「高大接続改革」には、まだ見えない部分がある。例えば、「大学入学共通テスト」の概要は示されてはいるが、具体的な活用方法を明らかにしていない大学も多い。現高校2年生の入試まで2年を切っている。文部科学省の大学入試実施要項では、受験生に影響のある変更は、大学が2年前程度に公表するとしており、同省は、6月3日、全大学に対して、活用方法を早く公表するよう文書による依頼を行っている。

また、英語4技能を測る民間の英語の資格・検定試験導入については、全国規模で公平性・公正性の確保が課題となり、国会でも取り上げられた。昨年12月には、高等学校・大学関係者、試験実施団体による会議が設置された。

今回、本校の「高大接続改革」に向けての進路指導の取組のいくつかを紹介したが、全国の高等学校でも、各校の実態に応じて進路指導をはじめとし様々な取組を行っている。各校にとって、目の前の高校生の進路指導をどのように行うのかは、まさに切実な課題である。

「高大接続改革」には、これからの我が国を支える生徒一人一人への期待が込められている⁽⁸⁾。「高大接続改革」は、高等学校の進路指導を変え、これからも変えていくであろう。しかし、高等学校における進路指導の精神は変わらない。進路指導は出口指導ではなく、生き方指導である。そして、「高大接続改革」は、この精神を推進しようとした改革である。

令和4(2022)年に本格実施の高等学校学習指導要領に基づく教育課程の編成も、高等学校の大きな課題である。

今年度、「働き方改革」という大きな課題も託された。校長として、日々の仕事の中に、「高大接続改革」等の大きな課題への対応をどのように落とし込むのか、今、校長の力量が問われている。

全国高等学校進路指導協議会としても、今後も、関係諸機関と連携し、「高大接続改革」をはじめ進路指導に関する諸課題について、有意義な情報交換・連絡調整を行い、各校の進路指導の向上に資するよう活動を

行っていく。

【脚注】

- (1) これからの時代に向けた教育改革を進めるに当たり、身に付けるべき力として特に重視すべきは、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度である。これからの教育は、この(1)～(3)(これらを本「最終報告」において「学力の3要素」と呼ぶ。)の全てを一人一人の学習者が身に付け、予見の困難な時代に多様な人々と学び、働きながら、主体的に人生を切り開いていく力を育てるものにならなければならない。このことは、今後、大学も含めた我が国の学校全体が、社会人や留学生も含めた多様な背景をもつ人々が集い、学ぶ場として発展していく上でも不可欠な課題である。(「高大接続システム改革会議・最終報告」平成28(2016)年3月31日)
- (2) 高い将来の目標に向かって自ら進路選択ができ、意欲的に勉学に取り組む生徒の進学希望をかなえることのできる学校として東京都に指定された13校。進学指導重点校7校、進学指導特別推進校7校に次ぐ、大学合格実績をあげる学校の中から、地域ニーズ・地域バランスや学校の取組状況等を総合的に勘案して指定された。
- (3) 杉並区にある全日制普通科高校。各学年8クラスの全24学級。自由な校風で知られる。
- (4) 進路指導は、生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持って、主体的に自己の進路を選択し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができるような能力や態度を育成することが重要であり、このため、各学校が進路指導の目標を持ち、その実現を目指して教育活動全体を通じ計画的、組織的、継続的な指導を行っていくことが必要であること。(文部科学省「生徒指導・進路指導の改善等について」平成28(2016)年7月29日) 進路指導は、理念・概念やねらいにおいてキャリア教育と同じものであるが、中学校・高等学校に限定される教育活動である。
- (5) 次期学習指導要領や大学入学選抜改革を踏まえ、アクティブ・ラーニングの視点に立った指導や指導資料の研究・開発を行い、全都立高校に向けて成果の普及を図ることを目的に、東京都が平成28(2016)～30年(2018)の各年度、毎年15校の学校を指定している。各推進校の指定期間は、3年間である。
- (6) 1970年代に米国で始まった「子どものための哲学」をモデルとしている。児童・生徒の自律的思考や相互理解を育む活動として導入する学校がある。
- (7) 平成36(令和6(2024))年度から地歴・公民分野や理科学分野等でも記述式を導入する方向で検討。(文部科学省「高大接続改革の実施方針等の策定について・大学入学選抜改革」平成29(2017)年7月13日)

「高大接続改革」に向けての本校の進路指導の取組

(8)「文部科学省では、変化の激しい時代において、新たな価値を創造していく力を育成するために、高大接続改

革の取組みを進めています。」(文部科学省「高大接続改革Webサイト」)